

源経信と遁世者

— 『撰集抄』における経信像 —

はつらに

「撰集抄」は遁世者讚美の説話を多数もつ仏教説話集である。そして、編者を西行に仮托している。

遁世者の説話の中には、編者西行が遁世者に会った自らの体験を語り、その遁世者を讚美するという体の話が十九話含まれている⁽¹⁾。こういった話柄は、編者西行が廻国修行し、草庵生活を営み、遁世者に最も近い位置に居る、あるいは自身遁世者なのであるから、いかにもありうべきことである。

ところで、「撰集抄」所載の説話の中には西行以外にも遁世者と出会うという体験をもった人物が登場する。その中の一人源経信が、どのように形象されているか、またどのように遁世者と出会うか、を考察したい。その際、他の説話集における経信像と比較しつつ進める。「撰集抄」の経信像がより明確になると考えるからである。

仁 平 恭 治

源経信の登場する説話は、次の五話である。⁽²⁾

- ① 卷二 4 「花林院、永玄僧正之事」
- ② 卷七 2 「経信卿逢、西山、禅僧」事」
- ③ 卷八 20 「経信俊忠鞠事」
- ④ 卷八 21 「鳥羽院、御時成通鞠、付持事」
- ⑤ 卷八 31 「経信大納言、前、鬼神出現事」

まず、「撰集抄」における経信像の基調をよく示している⑤から考察する。

九月の月の明るい夜、砧の音に感興を催された経信が、公任の歌、

から衣うつこゑきけば月清みまだ寝ぬ人を空にしるかな⁽⁴⁾
を詠じた所、それに対して

北斗、星、前横、旅雁、南楼、月下、擣、寒衣、

の詩を唱和する声が前裁の方から聞えた。驚いてそちらを見遣ると、背丈一丈五六尺、髪の逆様に生えたものが居た。

以上が話の概略である。編者は、この得体の知れぬものを、朱雀門の鬼などであろうかと推測し、それを「すき物」としている。すきものの鬼であるならば、経信は鬼のすき心を動かした訳である。つまり、経信はそれ程のすき者であり、それ故に鬼と出会うという体験をした、と考えてよいであろう。

次に③④の二話をまとめて考察する。というのは、この二話を含めた巻八192021は蹴鞠の名手侍従大納言成通を中心に据えた説話だからである。いうまでもなく、成通は若き佐藤義清の鞠の師であった。⁽⁵⁾ 説話の中でこのことに直接触れる記述はない。しかし、「撰集抄」作者が鞠の名手としての成通を取り上げたのは、編者として仮托した西行とのこうした関わりを踏まえてのことであろう。巻八19にある「かの大納言（注、成通）のたまひしは」というき。叙述は、この推測の証左とならないであろうか。

さて、巻八19では、成通が蹴鞠の修業に精進し鞠の精を見るに至った事が語られている。これを承けて、次の③巻八20では、経信・俊忠という二人は、鞠の道において鞠の精を見るまでには達せぬものの「末世にはありがたき程の人共」であり、それ故、成通が自分に劣らぬ者として褒めたことが語られる。なおこの話の大半は、経信・俊忠の二人の語った鞠の作法の叙述で占められている。

④巻八21も、話の中心に位置しているのは鞠の権威としての成通である。御代始めの鞠遊びの時、鞠を御前に出す作法についての話で、前半は鳥羽院の御代始めに成通が経信の作法をこがめたこと、後半は年月経て六十歳になっていた成通が、二条院の御代始めに役に当った俊成の作法を伝え聞いて、その父俊忠に優っていると褒めたことが語られる。

③④の二話からは、明確な経信像を得られようもない。しかしながら、別格の成通には及ばぬながら蹴鞠に造詣の深い人として位置付けられていることはわかる。なお、ここで注意しておきたいのは、③④を総合すると経信は西行の師成通また俊成の父俊忠と同時代人として捉えられていることである。このことのもつ意味は、後で触れる。

以上見て来た③④⑤の説話に登場する経信の性格は、次に掲げる③の冒頭のことばに集約することができよう。

経信の大納言、俊忠の中納言とて、当世の好士歌鞠の長者なる人いまそかりしが（以下略）

「撰集抄」作者は、経信を俊忠と並んで、当代のすき者（好士）すなわち風流人であり、歌鞠に秀いで当世の権威であった、と捉えているのである。

二

「当世の好士」の「当世」とは、④前半の話が鳥羽院の御代始めのことであるから、鳥羽帝即位（嘉承二年・一一〇七）前後の時代をさしている筈である。ところが史実に照らしてみると、⁽⁶⁾ 経信は既に承徳元年（一一〇九）に八十二歳で没して居り、また平治元年（一一五九）に六十三歳で出家した成通は経信没年に誕生していることになる。つまり、史実に拠る限り鳥羽院の御代始めに経信の鞠の作法を成通が正すという話は成り立たないのである。また、経信と並置されている俊忠は保安四年（一一二三）に五十三歳で没する。経信は五十五歳年上である。

この点について渡辺信和氏の詳しい御考察がある。⁽⁷⁾ 読み誤りを恐

れつつ、以下箇条書きに要約する。

- a、史実に照らしてみると、「撰集抄」において経信は、鳥羽院の治世・院政期に意識的に引き下げられているのではないか。
- b、その鳥羽院の治世・院政期は、時代表記において、それ以前の「昔」に対して「中比・近比」と捉えられている。経信の登場する説話の時代表記は、①「中比」②「近比」である。
- c、時代表記は、説話の述主である編者西行の「語り時間から見た作中時間」(犬井善寿氏による定義)⁽⁸⁾であるから、鳥羽院の治世院政期は、語り時間である今(「撰集抄」跋文によれば寿永二年一一八三)から見て、「昔」より身近な時代と認識されている。

d、と同時に「末世」の今とは、保元の乱によって一線を画している時代であり風流人が風流人として評価される王朝貴族の最後の時代であった。

e、経信がこうした鳥羽院の治世・院政期に引き下げられて、その時代の代表的風流人とされたのは、「昔」の中でも特筆すべき一条帝の治世の代表的風流人公任との対比のためである。⁽¹⁰⁾

以上の渡辺氏の御論から明らかのように、「撰集抄」において経信は、時代を引き下げられて鳥羽院の時代の代表的すき人として位置付けられている。なお、このような経信の捉え方は「西行物語」にも見られる。

大治二十年十月十日頃、鳥羽殿に御幸ならせ給ひて、はじめたる御所の御障子の絵ども観覧あるに、まことに優なる御気色にて、その頃の歌詠みたち、経信・匡房・基俊ならびに義清などを召されて、この絵どもを題にして、おのおの一首の詠を奉る

べき由仰せ下されけるに(以下略)

「西行物語」や「撰集抄」の作られた時代には、経信を鳥羽院の時代の「好士」と捉えるような漠とした時代認識をもっていたのかもれない。

さてここで、「撰集抄」は編者を西行に仮托していることを再確認しよう。そして「撰集抄」作者は、編者西行に鳥羽院の時代をどのように見させているのか、に注目したい。語り時間である今・寿永二年の西行にとっての鳥羽院の時代とは、「昔」より身近な、という以上の身近さをもって回顧される時代ではないだろうか。

仙洞忠勤のむかしは、人によるづすぐれて、露ばかり思ひ眩されじと侍りしかば、九夏三伏のあつきにも汗をのごひてひめむすに庭中にかしこまるを事とし、玄冬素雪の寒きにも、嵐をともとしていさごにふしても、竜顔の御いきざしをまもりて、いさゝかもそむきたてまつらじとふるまひ侍りき。(中略)おもはざるに長承の末の年より無常心にしてみて、君の忠勤よしなくて、妻子をふり捨てて出侍りしかば、我身は流浪の世をすて人となる。(巻六五)

「撰集抄」において編者西行の出家は「長承の末の年」(長承四年とすれば一一三五年)である。⁽¹²⁾それ以前の在俗期間は「仙洞忠勤のむかし」であり、それは鳥羽院下北面の武士として励んだことを指しているであろう。

編者西行にとって鳥羽院の時代とは、在俗期忠勤を励んだ頃と懐しく回想されるだけではない。巻一乙は、西行が筑前の国へ行った時土地の人に聞いた、青蓮院法眼真誉の遁世者としての事蹟を記している。真誉は「鳥羽院の第八の宮、伏見の大夫俊綱の御むすめ藤壺

の女御の御腹の子」であり、母女御の崩後七歳で比叡山に上ったが、十八歳の時失踪していたのである。そして、在俗時の西行は、「若君にて山にのぼせ給へりしには、御供つかまつりしぞかし」という形で真誉と深く関わっている。

また、巻九七の、西行が「いみじき道心者」という噂に引かれて尋ね、感銘をうけた高野の空觀房は次のような人であるという。

いまだかざり下し給はざりしきは、坊城の宰相成頼とぞ申侍りける。去ぬる永曆の末の比より、心をおこしてこのみ山にこもり給へり。

成頼は、高野宰相入道と呼ばれた人で、兄光頼も出家して葉室大納言入道と呼ばれた⁽¹³⁾。ところでこの兄弟は、巻八二「鳥羽院御隠、後琵琶事」によれば、不思議な体験をしている。

(鳥羽院の) 御中陰には、光頼、成頼などのいまそかりけるなんめり。この人々、夜の更行まゝに、その事となく悲しうおぼえて、寝ねもせられでおはしける(以下略)

その時、琵琶を弾じつつ白楽天の詩を詠ずる声がきこえた。その声はまさしく故鳥羽院の御声であった、というのである。ともかく、西行の訪れた成頼は鳥羽院の近臣であったのである。

編者西行は出家後も、鳥羽院ゆかりの人で今は讃仰すべき遁世者達を見聞することで、鳥羽院あるいはその時代と関わっているといえるのではないか。巻九一の覚英僧都もそのような遁世者の一人として数え上げてよいであろう。西行は、陸奥信夫郡くづの松原で松の木に刻まれた覚英の辞世の歌を発見する。覚英は富家入道殿忠実の弟で、興福寺一条院覚信(忠実の父師通の弟)の門弟であったが二十歳の時失踪していた。富家入道殿は「鳥羽院の御位の比」の人

である(巻六六)。

編者西行にとって鳥羽院の時代とは一体何であったのか。鞠の師侍従大納言成通の活躍した時期であり(④巻八二)、歌友俊成の父俊忠の時代である(④の他、巻八二三)⁽¹⁴⁾。「仙洞忠勤のむかし」であり、さらに入山の時お伴した青蓮院法眼真譽の、讃仰すべき遁世の跡に接するにつけても慕わしい時代であった。「末世」の今となつては保元の乱を境に再び戻らぬとしても、また歌鞠の道において自分には到底及ばぬとしても、やはり先達として敬慕する人々の生きた時代であった。あるいは戻らぬ故に、及ばぬ故に敬慕するのであるといふべきか。経信はその鳥羽院の時代の人として成通・俊忠と並置され、編者西行が自らの先達として敬慕する一人であった。「撰集抄」編者はそう位置付けているといえまいか。

三

鳥羽院の時代の代表的すき人経信は、遁世者と出会う体験の持ち主でもある。②巻七二は、大井川が舞台である。経信が公任に劣らぬ三船の才を顕した場所であり、また家集によればしばしば大井川逍遙に出かけ歌を詠じている。家集では紅葉狩のためであるのに対し、この話は桜狩に出かけたのではあるが、ともかくすき人経信の出かけた場所としてはいかにもふさわしい舞台設定である。

話の概略は次のようなものである。経信が「さるべきすき人ども」と連れ立ち、大井川に花見に出かけ西山を巡って欲を尽くしていた時、桜の根元に唯一つで瞑想している僧を発見した。僧は自らの素姓を明かすことはなかったが、一行は語り合ううちに感銘をうけその場で一夜を語り明かし、翌朝再会を約し、また別れ際一行の

中の経信の息俊頼が僧と連歌を詠み交わした。⁽¹⁶⁾後日その場所を訪ねたが、その僧の姿は見えなかった。

この説話の中心はあくまでも、編者が「山深くすまして、理事即一の悟り開けていまそかりけむ」と讃仰する、この僧である。経信一行は、いればシテに対するワキであるに過ぎないが、編者は山中で一夜僧と語り明かした彼らの振舞をも賞讃している。②の話における経信の位置付けは、遁世者と出会い感銘をうけたすき人一行の代表者、遁世者を理解する者である。

この経信像は「当世の好士歌鞠の長者」としていかにもあり得べきものであるが、遁世者の理解者といった経信像は、他の説話集には全く見られない「撰集抄」独自のものである。他の説話集に見られる経信像は、当代の有識者、和歌・琵琶の權威、すき人といった所である。「撰集抄」がもつ、説話世界の一般的な経信像からはみ出ている部分を、どう考えたらよいか。

ここで、自ら草庵生活者、廻国修行者である編者西行は遁世者と出会う体験を数多く持ち、遁世行為のよき理解者であったことが想起される。そうした体験を語るという体の十九話⁽¹⁾の中の西行像と、②巻七の経信像とは重要な点で似通っている。

西行が自身遁世者である点は異なるにしても、共に遁世者と出会い讃仰している。まず、その出会いの契機に注目したい。以下②冒部を引用する。

中比、帥大納言経信卿、西山の花みむとて、さるべきすき人どもいざなひつれて大井川の千本の桜ながめむとて、川のほとりにゐて、水のおもてにたゞよふ花の波にたゞよはされ、藻屑にまじるわざを敷きて、心をいたましめ、心なき嵐を恨みなんど

して、日を暮しながら給へりけり。いかだに乗り、むかひのはたに寄せさせて、おのくお立ち、峯によぢ谷にくだりて遊びなどし給ひけるに、ある木の本に、齡五十ばかりなるが、かたびら一をなん着たる僧、禪定する侍り。

経信一行は、すき心の趣くまま山巡りをしている折に僧を発見したのである。いわばすき心に導かれて遁世者と出会うという、こうした話柄は、西行の体験談十九話中七話ある。⁽¹⁷⁾例を掲げる。

○以往、あづまぢのかたへさそらへまかり侍り。宇津の山へのさくら見すぐしがたくおぼえて、奥ふかく尋ねいりて侍りしに、いとゞだにつたのほそ道は心ぼそきに、日影ももらぬ木の下に、かたのごとくなる庵むすびて、座禅せる僧あり。(巻一五) ○永曆のすゑ、八月の比、信濃の国さのわたりを過ぎ侍りに、花ことにおもしろく、虫の音声々鳴わたりて、ゆきすぎがたく侍りて、野辺に徘徊し侍るに、玉銚の行かふ道のほかに、すこし草かたぶくばかりに見ゆる道あり。いかなる道にかあらんとゆかしく覚えて、たずねいたりて見侍るに、すゝき、かるかや、をみなへしを手折て、庵むすびてゐたる僧あり。(巻六八) 前の例は、宇津の山の桜に心惹かれ山深く分け入ることで、後の例は、秋の野を花や虫の音に心惹かれ徘徊していたことよって遁世者を発見したのである。

次に、別れ際のこと、経信一行の中の俊頼がよみかけた句に僧が見事な句を付けている。このことで一行は、僧に対する尊崇の念を一層深めたのである。このような、遁世者との交流の中で連歌または和歌を詠み交わすことは、西行の体験談十九話中七例数えることができる。⁽¹⁸⁾一例として巻七10「吉野、奥、遁世者、事」を掲げる。

西行が吉野山に庵を結んでいた折、庵の前の桜の下に物乞いと思われる僧が休んでいたので、「しばらく、花ながめ給へ」と声をかけた所、凶らずも和歌をもって挨拶された。西行も歌を返し、それをきっかけにこの僧が自分と同じく吉野山に庵を結ぶ遁世者であることを知り、その庵を訪ねたという話である。この話においても、庵の前の桜が西行と遁世者とを結び付けた訳で、出会いを導くものとしてすき心を考えてよいであろう。そして和歌のやりとりは、初め物乞いと見下していた僧との間に心の交流をもたらしたのであり、遁世者として尊崇の念を抱く端緒であった。

編者西行は、すき心に導かれて遁世者と出会い、また連歌・和歌によって心を通い合わせ、遁世者に共鳴しているのである。以上の事はあるいは、遁世者自身しばしばすき人であり、庵を結ぶような場所がすき心を満足させる「心すむ所」であるから、また連歌・和歌は通例の嗜みであるから、取り立てて言うまでもない事柄かもしれない。しかし、遁世者との邂逅という話の中での、西行と経信との位置付けはあまりにも近しくはないか。②巻七の経信は、西行と近似の形で遁世者と関わっている。とすれば、経信は鳥羽院時代のすき人として敬慕されるに留まらず、遁世者との邂逅という点でも編者西行の先達ではないのか。そして、その邂逅はすき人であったからこそ可能であったのである。

四

①巻二四における経信と遁世者との出会いは、遁世者の訪れという形である。舞台は、これも「当世の好士」経信にとっていかにもふさわしく、田上の山荘である。¹⁹⁾

九月のある日の夕方、経信の許にやつれた姿の僧が物乞いに訪れた。経信はこの僧を「いかにも只人にあらず」と見抜き、素姓を尋ねる。僧は始め素姓を明かさなかったが、問い詰められて、もと興福寺花林院に住み順調に位階を上っていたが、女犯という破戒行為によって寺を放逐され、今は物乞いとなつていると、泣く泣く身の上を明かした。経信は女ともども世話をするからここに住むよう申し出た。僧はそれを拝承したかに見えたが、翌朝になつてみると、僧の姿はなく一首の歌

うしやげにたなかみ山の山さびて法の道しば跡しなれば
が書き残されているばかりであった。

そこで経信は、この僧の話に出た興福寺に問い合わせる。時の別当玄覺の語る所は次のようであった。

花林院永玄僧正といふ人、年ごろ世をのがるゝ心ふかくて、た
びくゝとぢこもり給へしを、寺惜みとめ奉りて、こゝろにもあ
らずながら延給ひしほどに、いにしき月のころ、貫主にのぼる
べき由、その聞え侍りしかば、はや跡なくうせ給ひにしかば、
弟子どもうつゝ心もなくて侍る。いづくにこそおはすれとも聞
かざりしかば、流浪し給ふらん(中略)すがた有様、いさゝか
もたがはず……。

真実を知らされた経信は感涙を流した。

以上が①の話の概略である。この後、編者は永玄を、「撰集抄」の中で遁世者の先蹤として位置付けられている玄實になぞらえ、また「摩訶止観」の一節に照らし合わせてつづ賞讃している。この話においてもシテは、名聞利養を捨て自らを女犯の破戒僧と偽り経信を欺きまでして、遁世の志を貫いた永玄である。一方、ワキの経信は

欺かれはしたものの、初めに見抜いた通り「只人」ではなかった永玄の眞の姿を知るに及んで感銘をうけている。

この①巻二4の経信像も、②巻八2と同様説話世界の一般的経信像からはみ出た、遁世者の理解者である。②の場合、すきに導かれた邂逅という話柄であり、編者西行の先達として考えることで説明できるが、①はどうか。この話柄そのものは、渡辺氏の御指摘の通り徳をかくすために自らを女犯の破戒僧と偽るという偽悪が主題であり、「発心集」以来の遁世者説話の話柄の一つである。問題は、遁世者と関わるのが他の人ではなく、なぜ経信なのかである。

①の話は、遁世者と出会った側に立つと、その遁世者の素姓を元の住寺に尋ねることで眞の姿を知り得たという話柄と捉え直すことができる。ここで想起されるのが、巻四6の編者西行の体験である。越路舟さか川の渡し舟に偶然乗り合わせ連歌をよみ交わした僧は東大寺の大臣得業慶縁と名告った以外、自らを明かさなかった。翌年東大寺に参詣の折、この僧の事を俊恵に尋ねると、東南院の遺弟、久我の大臣の御子であり、将来を囑望されていたが、三年前失踪していたという。つまり慶縁は、名利を捨てた諸国流浪の遁世者であったのである。

この慶縁も①の永玄も、本寺を失踪した流浪の遁世者である。西行や経信は、彼らの本寺に問い合わせることでその眞の姿を初めて知り得た。尋ねた相手は西行の場合、歌物語をし自詠を披露するような問柄の俊恵である(巻五14)。同様に経信の場合も、興福寺別当玄覚との間に何らかの関係を想定できないであろうか。しかし、承徳元年(一〇九七)に没した経信と、天治二年(一一二五)に興福寺別当就任、その後一時停任、天承二年(一一三二)還任の玄覚

とは、時代が食い違う。「撰集抄」における経信は、先述の通り鳥羽院の時代に引き下げられているのである。そこでいま仮に、経信をその息俊頼に置き換えてみる。

玄覚は「京極の大殿(師実)」の子であり、兄弟には「後二条大殿(師通)」、また玄覚同様興福寺別当になった「一乗院の覚信大僧正」(巻九11)と尋範がいる。俊頼の孫教縁は、玄覚の兄弟の一人忠教の養子となり、安元元年には興福寺別当に就任している。そもそも六条源家は、「藤氏の嫡々として、よろづ天下のことわざをとり行はせ給ひ」し摂関家(巻六6)と関わるものがあつたようである。師0の弟で橋俊遠の養子となった俊綱は、経信と和歌を通じて親交があり、俊頼は俊綱の養子となっている(22)。しかし、「撰集抄」作者がこの事実を踏まえていたか否かは今明らかにはし得ない。ただ、

経信あるいは俊頼が興福寺別当玄覚に問い合わせることは不自然でない、とは言える。

次に視点をかえ、藤原氏の氏寺興福寺と六条源家との関わりを探ってみる。俊頼の孫教縁が別当職に就いたことは既に述べた。さて教縁は永縁の弟子である。そして、永縁が一門の僧侶を中心に住房花林院において催した「奈良花林院歌合」あるいは「永縁奈良房歌合」と呼ばれる歌合は、基俊・俊頼両判があり、歌論史上注目されている(23)。俊頼は、判者としてのみならず、撰縁の出詠歌の代作者としてもこの歌合に関わっている。永縁は勅撰歌人、また基俊・俊頼と共に「堀河百首」の作者でもあり、著名な歌人である。と同時に保安二年(一一二二)興福寺別当に就任している(20)。玄覚の前任者である。

ここで①巻二4の話を改めて見直すと、経信の所へ訪れた僧は

「花林院永玄僧正」であり、別当玄覚の前任者となるべき筈であったが、名利を嫌って失踪していた。永玄とは永縁ではないのか。少なくとも、永縁を暗示するような書きぶりである。もっとも、「撰集抄」の中で永玄が永縁その人であったとは困るのである。というのは、巻五4に歌僧永縁が次のように紹介されているからである。

中比、山階寺の別当永縁僧正と云人なんおはしけり。知恵の人にすぐれたるのみにあらず、六義の風俗をきはめ侍り。ある時は、身を禪定にひそめ、心を法界にすまし、ある時は、花のものと月の前によりて、言葉を和州にやわらげ給へり。(以下略)

①の永玄は、もちろん史料にその名を見出すことはできない。先に取り上げた、西行の出会った巻四6の慶縁も同様であり、また西行が辞世の歌を発見した巻九11の覚英も実在しない。これら永玄・慶縁・覚英といった、名利を捨てるために流浪の世捨人となった人は、「撰集抄」作者によって仕立て上げられたといえるのである。慶縁は東大寺東南院の遺弟、覚英は興福寺一条院覚信の門弟と説明され、実在の有慶・覚信の門弟という形でいかにも実在した人物であるかのように描かれている。

①の永玄の場合、玄覚の前任者となる筈であったという形で実在感を付与されている。そして経信は、その永玄に関わったと描かれる。渡辺氏は、会衆の多くが地下人・僧侶であった俊恵の歌林苑のあり方と同様、「遁世者達の自由に入出入をゆるされる相手としての経信像」を「撰集抄」作者がもっていたかと想定されている。①の経信像は、この可能性の他に、今見て来たように、興福寺との関わりを踏まえていると想定することも可能ではないか。

なお、永縁と経信との直接の関わりの可能性も皆無ではない。永縁は永承三年(一〇四八)生まれであり、一方経信は承徳元年(一〇七七)没であった。また、「散木奇歌集」第十に次の記述がある。⁽²⁶⁾
昔七大寺をかみに、故帥大納言殿、などにおはしましたりけるに、東大寺の長済律師か房にと、まらせ給たりけるに、房主かこのむことにてこよひ和歌会さうらひなんと申ければ、よませ給て講するをりに、(以下略)

経信一行を迎えて僧房で歌会が催されたのである。たとえ経信と永縁の直接の関わりがなかったとしても、経信と奈良の僧侶たちとの和歌を通じての交流は、この例以外にも充分想像される。そして「永縁奈良房歌合」が鎌倉期以降興隆した南都歌壇の黎明として位置付けられるものであつてみれば、⁽²⁶⁾「撰集抄」作者が経信と興福寺さらには永縁を結びつけようとしているならば、その意図はこの辺にあったとすることも可能ではないか。この推測は「当世の好士歌鞠の長者」という経信像にもふさわしいと思うのであるが、いささか付会に過ぎようか。

おわりに

①巻一4の経信像の形象の意図は、未だ十分に解明できていない。しかし、②巻七2のそれと同様、遁世者の理解者として位置付けられていることは確かである。こうした経信像は説話世界では特異であり、「撰集抄」独自のものであった。

「撰集抄」の中で、編者西行以外に遁世者と直接関わりをもつ人物は、経信の他、富家入道殿忠実(巻三4)、⁽²⁷⁾侍従大納言成通(巻二8)、徳大寺の大臣(巻五7)⁽²⁸⁾がいる。彼らはすべて「中比・近

比」の代表的な貴族である。つまり、遁世者と直接関わるといふ体験を編者西行に先んじてしている人々は、西行の敬慕する鳥羽院の時代に生きた人々であり、経信はその中の一人なのである。さらに、いかにも「当世の好士」らしく、すきに導かれての遁世者との邂逅という点でも、経信は編者西行の先達であった。

- (1) 本稿は、西尾光一氏校注『撰集抄』(岩波文庫)に拠る。以下十九話を示すと(算用数字はその巻の第何話の意、巻一5、巻二2・6、巻三1・2・5・9、巻四3・6・7、巻五11・13、巻六4・8・11、12、巻七10、巻九8・11である。なおこの中には、西行が善知識となり後遁世者となったものも含む。
- (2) 草庵生活は巻一7、巻七10、廻国修行は巻二4を始め随所に記されている。
- (3) ①以外の四話は略本にない。ここで広略の問題に触れる余裕はないが、略本にない説話の経信像がすぎ人であることを指摘しておく。
- (4) この「から衣……」と次の「北斗……」は共に『和漢朗詠集』攝衣に収められている。作者はそれぞれ紀貫之、劉元叔。
- (5) 堀部正二氏「西行と蹴鞠」(『中古日本文学の研究』所収)
- (6) 以下『尊卑分脈』に拠る。
- (7) 『撰集抄』における源経信「(『中京大学文学部紀要』第15巻第3号)
- (8) 「昔・中比・近比と過ぎにし比など——『撰集抄』の述主と作中時間——」(『説話』第4号)
- (9) 巻一7の記述の他、巻六6では保元の乱で対立した忠通・頼長兄弟について父富家人道殿忠実が春日明神の託宣を蒙ったことが語られている。
- (10) 公任の説話は巻八9・10・14。その他巻五15、巻八31、巻九1にも

名があがる。巻八31で経信の吟じた貫之の歌を公任作としたのはあるいは意味があるのか。

- (11) 引用は、桑原博史氏『西行物語』(講談社学術文庫)に拠る。
- (12) 巻七10にも同様の記事がある。なお、史実では保延六年(一一一四)出家である。
- (13) 『尊卑分脈』等による。
- (14) 巻八23の語柄は、『袋草紙』「宇治拾遺物語」『今物語』に見える著名な話であり、おそらく時代を待賢門院崩御の翌年とし、公任の歌を俊忠作とし、通俊を俊成に置き換えることによって、編者西行に関わりのある話として『撰集抄』の中に取り込んだのであろう。
- (15) 『袋草紙』『古今著聞集』所収の説話がある。
- (16) この連歌実は、『新古今和歌集』一一八六番の良経の歌の本末である。
- (17) 巻一5、巻二6、巻三1、巻六8・11、巻七10、巻九11
- (18) 巻三1、巻四6、巻五11、巻六4・12、巻七10、巻九8
- (19) 経信・俊頼の家集等から田上に経信の山荘があり、そこで山里の叙景歌をものしていることがわかる。
- (20) 『僧綱補任』(群書類従所収)等に拠る。
- (21) 『僧綱補任』(大日本仏教全書所収)巻六の裏書大治三年の条。
- (22) 親交は経信の家集等から、養子の件は『中右記』寛治八年七月十四日の条。なお、俊綱の名は巻二2に見える。
- (23) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』第六巻の解説が詳しい。
- (24) ここでは注23の萩谷氏の考証に従っておく。
- (25) 引用は、『私家集大成』に拠る。
- (26) 多川俊映氏「興福寺の歴史とその教え」(『古寺巡礼奈良 興福寺』(淡交社刊)所収)
- (27) この他、巻四2では忠実の養子、巻九11では忠実の弟が遁世者とし

て登場する。

(28) 卷五五には西行が徳大寺家へ参ったとあるなど、西行と徳大寺家との関わりは『撰集抄』作者に意識されていたであろう。

付記 本稿は昭和五十六年九月の筑波大学国語国文学会における口頭発表を發展させたものである。怠惰な私がこの稿をまとめ得たのは、偏に、発表の場で御助言を戴いた小西甚一、野口博久、田口和夫各先生、また終始御指導を仰いだ桑原博史先生、その他多くの方々の御好意御助力の賜である。